



# プロジェクト・オンブレ

2006年2月17日～2月23日

をたずねて

「ぜひ、スペインの薬物依存の現状や対策について、そして治療共同体のプログラムや家族プログラムをたっぷり味わってきて。そして、見て、聞いて、触れて、感じたことを私たちに伝えて」という、薬物依存症者全国家族連合会事務局・小松崎さんのメッセージを手に、岩井代表以下 11 名は、寒い 2 月、スペインに飛び立ちました。現地で迎えてくださった 2 人のシスター、そして、近藤京子さんのみごとな通訳の助けを得て、私たちはとても良い体験をすることができました。

## プロジェクト・オンブレとは

1980 年代、スペインはヘロインの乱用拡大期にあり、薬物解放プログラム (PLDS) を基盤としたクラシックな治療ラインが広がりました。さまざまな公的機関、教会、専門家グループが対応を模索するなか、ヨーロッパやアメリカの経験と、イタリアで始まった Progetto Uomo とよばれる教育セラピーをヒントに生まれたのがプロジェクト・オンブレです。この予防・トリートメントのための〈教育・セラピー〉プログラムは、予防・リハビリテーション・社会復帰の三本柱を基本にしています。

マドリッドに本部(協会)があり、国内 23 のセンターが加盟。15 の自治体・州にまたがり、年 1 万 2 千人以上の薬物依存症者を受け入れています。各センターは自立した形で管理・運営され、協力関係のなかで、経験の分かち合いや共同研究やトレーニングをおこないます。プロジェクト・オンブレの治療的介入は家族にもむけられます。こうした多様な活動は、ユーザー(レジデント)の要望に応える中でつくられました。

すべてのプログラムは、依存症者の自由意志によって成り立っています。治療を始めたいと願うあらゆる人に門戸はひらかれており、経済的な理由や、人権・国籍で拒否されることはありません。そして、宗教とは関わりがなく、営利目的でもありません。

(事前に作られた研修のための資料からの抜粋)

## 研修の日程

20 日 午前	レクチャー：プロジェクト・オンブレとは？(セルナダス治療コミュニティ/ディレクター：オフェリア氏)
20 日 午後	〈本人〉プログラム参加 〈家族〉施設見学と家族の体験談とプログラムの説明(ディセンタセラピスト・プリ氏)
21 日 午前	〈家族〉 ガリシア家族・友人協会とプロジェクト・オンブレの運営について (オンブレ・ガリシア責任者/ゴメス氏、ガリシア家族会会長/ミゲル氏) 親の「コミュニケーション・グループ」に参加(プリ氏)
21 日 午後	〈家族〉質疑応答(ゴメス氏、プリ氏) 全員で夕食。歓迎を受けた後、解散



美しい広大な敷地を持つ元貴族の館が寄贈され、リハビリ・センセンターに

# オンブレとは

セルナンダス治療コミュニティ  
ディレクター・オフェリア氏

馬が遊び、小川が流れる広い広い敷地の中に建つ元貴族の持ち物だったと言う美しい館にセンターがあります。その1室で、「薬をやめるだけではなく、人が人間らしくあるために、プロジェクト・オンブレのプログラムが存在する」と語ってくれました。



スペインには、全国で23のオンブレがある。アメリカのディトップの考え方や、ヨーロッパの経験を合わせつくられたのがオンブレである。生まれた当時と変わっていないこととして、

- ☆ 専門家によるチームと回復者のチームがいっしょにやる。1年半の教育によって指導者をそだてる。
- ☆ 何の宗教にも属さないし、政治とも関係ない。営利を目的としたものでもない。
- ☆ 国とガレシア自治州の経済援助を受けている。家族の援助もあるが、決まった額ではない。
- ☆ 薬物をやめたからプログラムが終わりとは考えない。人間形成のプログラムをずっとつづける。

## ガリシアのオンブレについて

16年前、薬物依存症のプログラムとして始まり、その後さまざまな薬物に対応してきた。ここに繋がる人は、1つは、家族とともにくるユーザーで、本人とともに家族も教育していく。もう1つは他の施設からくるか、一人で来るユーザーで、この場合は、まず本人の前で家族や頼れる親戚に電話するが、家族が疲れきっているときはスタッフとともに住める家をさがし、動機付けまでもっていく。〈单身寮あり〉

①行動変容	②感情	③認知	④価値観に従って変わる
3ヶ月	—————> 10ヶ月の入寮の中で		

もともと人間は上表が相互に関係しあって成長していく。成長していく中で、このバランスが崩れたとき、“もうダメだ”と誰でも思うが、それぞれ何らかの解決策をとる。依存症者は薬物にその解決を求め、上表がバラバラになっていく。これをプログラムによって繋ぎ、大人の思考に変えていき、自立した人間に形成していく。しかしだからといって、大人の思考を持っていないとこども扱いにするのではなく、セラピストの力をかりて変えていくことが大切。

①では 3ヶ月間ディセンターで、プレプログラムを行う。家族と、またはスタッフの送り迎えで毎日プログラムに通い、家族とはなれ、薬とはなれる完全な動機付け、心構えをつくる。自分の現実をとらえてもらい、自分の目の前の問題が何かをとらえてもらう。家族も自助のダイナミズムのなかで変わっていく。過去のことでなく、現在のこと、何を考え何をとらえていくかを話すことが大切。

起きる時間、タバコの時間、掃除する時間もきめ、リスクを減らしていく。そして人間らしいことをしていくことで、リハビリをしていくに値する人間なんだと自覚していく。家族は、家の中で本人がどんな行動をとったかを見守っていく。また、ユーザーはこの3ヶ月間で、自分だけでないということ、仲間を見ていくことで気づいていく。



食堂



男性の入寮者の部屋・清潔



スタッフの宿泊用の部屋

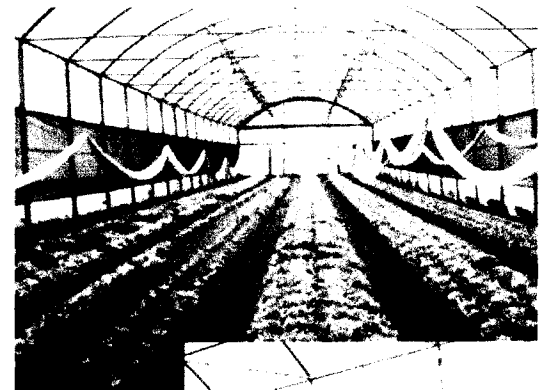
②～④では 10カ月間治療コミュニティーに入寮し、その後、半入寮か通いで社会復帰プログラムというのが伝統的プログラム。入寮して6ヶ月で週末に家に帰って、家族関係のプログラムに取り組む。なぜなら家族の関係を大切にしているからで、家族との関係を切るといことはしない。家族はこの10ヶ月間、家族向けセミナーで学ぶ。ユーザーはこの10ヶ月間で、自分のことについて考え、自分のことを語り、気がつくという初めての経験をもつ。今、40人のユーザーがいるが、この施設の管理は全て彼らが当番制とする。彼らは、誰かと協力して何かを行うということを知るのだが、これは、依存症者には大切なこと。夫婦で依存症者の場合や恋愛関係になった場合は別の施設や、県をまたいで分けるなどするが、子供との接点をもつ。大体プログラムは、朝8時に起き夜11時に寝る。この間に、セラピーの時間、仕事の時間、勉強の時間の3つをとる。こういう風にプログラムをやる中で、おだやかになって、責任感をもてるようになり、家族にとってもそれが見えるようになる。グループセラピーでは、家族、セクシャリティー、アルコール、周囲の人々との関係、という4つのセラピーを受け、それが終わると社会復帰のプログラムに入る。これは施設ではなく、家族の傍だとかでおこなっていくが、これが最も難しく、今まで学んだことを社会に生かしていかなければならない。社会に出ると、薬物は手に入るし、諸々の欲望を前にゆれる。スリップする原因ともなる。週3回のグループセラピーに参加することで補助していく。この時期は家族にとっても大きな不安の時期なので専門家のセラピーを受ける。



回復プログラムとして、鱧の養殖が



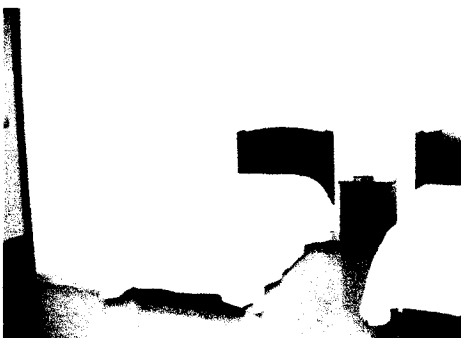
入寮者がつくる野菜のハウス



ハウスの中にはみごとなレタス  
そして、農業指導のおじさん  
これらは入寮者の食事に。余れば販売も



母子で入寮する子どものためのプレイルーム



母子で入寮できる部屋・とてもきれい

「薬物依存症者の特質は、  
自信がなく、自尊心がなく、  
何も出来ないと思ひ、感情のコントロールができない。  
そして、自分が正しいと主張し、人の言うことを受け入れ  
れないわ。そのうえ、“スゴイ、嘘つき“よ”と語るオフ  
ェリアさん。聞いている私たちの中から「ソー！ソー！」  
と言う共感の声がながれる。

しかし同時に、その身勝手ともいえる薬物依存症者に  
寄り添い、人間としての尊厳を取り戻すために大変な熱  
意でとりくんでいることが語られる。そしてそれは、依  
存症者を抱え苦しむ家族に対しても。

ホテルなみの清潔で美しい施設とともに、私たちは  
ただただ、ため息をついていた。



左から2番め プリさん

## 家族の体験談とプレプログラム

サンティアゴ・デ・コンポステーラ

デイ・センター／セラピスト：プリ氏

プレプログラムのデイ・センターは3ヶ月毎日通えるようガレシア自治州では4カ所つくられている。プレプログラム中は、1人で外出も外泊もしてはならないし、電話もできない。薬物を使った仲間とも挨拶もしてはいけない。

### 家族の体験

**Aさん** 本人は32歳の息子 「15歳で薬を使用、刑務所に1年。ガリシアでは、捕まったとき、プログラムを受けることで刑務所に入らないことができる。執行猶予の代わりにプログラムに参加。私は、問題があることはわかっている、息子の依存を認めることができず、ひどくなるまで認められなかった。彼もオンブレを知っていたが『自分たちはちがう』と入ることを認めなかった。前にも別のセンターに入ったことがあるが、食べ物は与えられたが、人間として扱ってもらえなかった。人間性を回復させる、人間形成を考えてくれるところではなかった。しかし、プロジェクトオンブレには、それがあった。息子は、前はとてもきれいな格好をしていたのに、ボロボロの状態になり、でも薬がほしくて、躁うつ病でもあった。オンブレに入って出てを4回繰り返したが、オンブレは違うやり方でチャンスを4回与えてくれた」

**Bさん** 本人は40歳の弟 「何年前から弟は薬を使い、あらゆることをやったが、私たちの働きかけを拒んだ。しかし、どんな状態でも仕事はつけた。38歳のとき、私に“助けてください”とやってきた。プロジェクトオンブレに電話。大変だったが、18ヶ月のプログラムを最後までやって、私と暮らしている」

**Cさん** 本人は息子 「17歳の時から初めて、現在26歳。前からオンブレを知っていたが、何度もすすめたが彼は入らなかった。違う施設に入って9ヶ月して出たがダメで、追い出したらカナリヤ島で乞食の状態になり、ダメだったらオンブレに入ることを条件に仕事をさせた。コカインのプログラムで回復、今は“もっと早くくればよかった”とやっている。プログラム最後の段階で、スリッパをしないか心配」

### 質疑応答

岩井「追い出す作業はどうしたのか」

Cさん「彼はしょうがない状態だった。私の兄弟や親にも、『絶対に手助けしないで』とやった」

Aさん「息子を手放すことはとてもヘビーだった。でもそのことが息子の為だと言われた。家族にも助けてもらえず、ウソをつく相手も、お金を借りる人もなく、本当に孤独な状態になったときにつながる」

岩井「家族はオンブレにいつから繋がったのか」

Aさん「15年前からオンブレ知っていたが、ずっと目をつむって、とことん落ちるまでプログラムを知ろとしなかった“自分の息子は薬物依存症者です”と口にできて初めて繋がることできた」

プリさん「オンブレを知る機会は数年まではなかった。相談できる場所があるということが、少しずつ知人をつたってひろがる。又、回復した子を見て、近所の人『では、うちの子も』となったりする」

プリさんは60歳。施設長ゴメス氏とともにガリシアのオンブレ設立からかかわってきた方で、サンチャゴ・デイ・センターの責任者でもある。「薬中は、いい部分を下の方に押し込んでいるの。それを表に出して生かしていくこと。コントロールしたりされたりするのではなく、守るのでもなく、尊重していくことが大切。この仕事から私は多くのものを学んできたわ」と、その経験を少しでも私たちに伝えようと、多くの時間をさき、熱く語ってくださった。



## プリさん プログラムの説明

スペインでは、捕まったとき、裁判が終わったときに、刑期によってプログラムを選ぶことが出来る。刑が軽い場合は刑務所に入らない。自治州内のオウレンセ刑務所では治療コミュニティがありオンブレのプログラムをおこなっている。最終段階で受けると刑期が短くなる。また、ガリシア自治州では、本人が希望し認められたら、オウレンセ以外の刑務所施設から移ることも可能になった。



コカイン の場合は、破壊されていないので働きながら受ける夜のプログラムをやる。その他は伝統的なプログラムをやっている。ここでは、繋がった人に出来る限り介入することで可能性を広げていく。

家族はとても大切。本人は、家族を利用し易い材料として使い、薬を使うことで家族を壊す。反対に、薬の世界を壊し、家族を取り戻すことが必要。子どもは、薬か親かを選ばなくていけない。親は「薬を選ぶか、親を選ぶか」ハッキリ言わなければいけない。親がハッキリ言えるために私たちは援助する。薬に対し「私は嫌」「この家では嫌」など、はっきり「ノー」を示すこと。「もし、薬を使うのを選ぶなら、私は何も出来ない。何とかしてほしいと思うのなら、私は手助けできることがある」と言えるまで手助けする。選択肢を差し出すことで、使うか手助けを求めるかを彼が選択することになる。もし外に出たとしても、それほど長くかからない。自分も納得してオンブレに来る状態になる。そういう状態でも、逃げ出す人もいる。正直になれない人、自分の抱えている問題を家族にも言えない人が逃げ出す。

ここに繋がって2、3日でセラピーをはじめ。最初の日、いつから、どんな感じで薬物を使っていたのか等の質問の中で、親がどんな親か、親子がどんな関係かを見ていく。多くは、親が子にリンクしているか、父親の無関心が多い。親の抱えている問題に留意しつつ希望を持たせていく。

### グループセラピーと個人面接について

☆ 月水は親のコミュニケーションのグループ。与えられた課題をどのようにやってきたかを聞く。親が子どもの行動や様子を話す、しかし、実際と違う場合は個人的セラピーをする。これを何度もやると、周りからも指摘される(=直面化)。本人が親を操作することによって、本人の行動を正直にいけないことが多い。たとえば、「黙っていないとプログラムに参加しない」など。親が正直になることが、子どもがプログラムに通い続けることにつながる。

☆ 金曜日は自助のグループセラピー。家族は別々のグループに参加する。現在の気持ちとか、難しさを話す。これが回復の大切な機会になる。今の状態に焦点をあてることで、その人自身に焦点をあてる。

☆ 月1回家族全員参加のセミナーがある。1回目は本人の責任、2回目はどうやってこのプログラムを進めるか、3回目は本人の回復プロセスを学ぶ。家族が変われば、子どもも変わる。子どもが変われば、家族も変わる。家族が子どもを尊重すれば、子どもも家族を尊重する。子どもが家族を尊重すれば、家族も子どもを尊重する。互いに尊重し合わなければ、家族は成り立たない。ここに来る人たちに「あなたたちが主役」と言うことをわかってもらう。

☆ 特別のセミナーを9月頃にやる。年1回のセミナーで、全てのプロセスに参加している親が全て集まり、自助について学ぶ。

☆ その他、価値観のセミナー、自由時間のすごしかたのセミナー、健康のセミナー、家族のセミナーなどなぜこういうセミナーをするのか。親は“子どもをこうしてしまった”という罪悪感をもっている。親を援助する必要がある。

## 個別セラピー

☆親と子どもセラピーを毎週1回、夫婦のセラピーは必ず参加で毎週1回。このミックsgループを最初の1ヶ月ぐらいおこなう。目的は2つ。1つは、落ち着いてもらうこと、解決できる問題だと感じてもらう。2つ目は、子どもが親の前で、自分のやるべきことを話せるようになること。たとえば“目覚ましを鳴ったら必ず起きる”と言ったら本人の責任にする。家族は本人の責任を遂行してもらうため、起きて来ないからといって起こさない。続けていくと、同じ課題に対し、どこかで本人の話と家族の話に食い違う部分が出てくる。本人のセラピストと家族セラピスト同志はリアルタイムな情報交換によって、どちらが嘘をついているのかわかりやすく、次に生かしていきける。親子・夫婦セラピーでは、親が子をどう見ているか、子が親をどう見ているか、夫婦のコミュニケーションはなど、その家族内の調整すべき点が見えてくる。

☆家族史について話してもらうセラピーでは、どう育ち、どう結婚したのか、夫婦の関係、子どもとの関係など家族史を話してもらう。育てる中で子どもにどうしたか、子どもの歴史について子どもに聞く。そういう中で気づきをうながす。子どもは小さかった時からのさまざまな弱さを持っているが、薬を使ったときに全ての責任をなすりつける。子どもの状態を正しくつかむことで、どこに問題があったかを知る。親の育ってきた環境が、こどもにも影響を与えている。親とその親との関係を知ることはとても大切。子どもが依存症になったことで多くの苦しみを持つが、回復した時は、そういう機会を得なかった人より、良い家族関係を得る。

☆生育歴を含めた本人向けプライベート・セラピーでは、生育の道のなかでどこに穴があったか、何を変えなければならぬか気づかせ、何が変わり、何が足りなかったか本人が言えるようになる。

☆最後に家族面談。本人の感情をどう扱うかを学ぶ。次にどんな感情について学ぶ必要があるか気づかせる。

個人の課題を洗い出し、調整すべき家族関係の穴を見つけ、治療コミュニティでの本格的  
なりハビリにつなげることがプレプログラムの目的でもある。

## 家族会会長ミゲル氏

家族協会の収入 年会費12ユーロ×会員=7万ユーロ  
1ユーロ=コーヒー1杯。「1カ月にコーヒー1杯分のあなたの協力を」と呼びかける

支出は 27万ユーロ (寮維持費 7.5万ユーロ、その他 18万ユーロ など)不足はオンブレからの資金援助(協会は寮を運営している)と、さまざまな資金集め活動で。半数は家族以外の人。家族でない人と一緒に協会を作るのは大切なこと。

### 協会の目的

- ・薬物依存症に関するさまざまな対策の啓蒙に協力する。
- ・プロジェクトオンブレの活動の情報を伝える。
- ・家族同志の経験を分かち合う。家族同志であれば希望を与えながら、プラスの助けをすることができる。
- ・コンサートをやったり、コメディアンをよんだりして普通の人の関心をあつめ、資金を集める。毎年毎年前年の予想を超える人が集まり会場に入りきれない。
- ・ゴメスさんが政府に頼みに行くとき、家族会も協力する。ゴメスさんの後ろには4960家族が付いているのは大きな力になる。1人の依存症者の周囲にはたくさんの家族・友人がいて、多くの人がこのプログラムを理解してくれるのは大きな力。年々会員は増加し関心は高まる。

「スペインの仲間  
たち、ありがとう」  
別のパーティー



「ガリシアのプロジェクトオンブレの経費は年間300万ユーロ(≒4億5千万)かかるが、その70%を国と自治州から援助を受け、その他寄付などで賄っている。プロジェクトオンブレのプログラムは厳しいが回復率は高く、それが評価され、私立だが援助を受けることができる。ここまでには16年間のたたかひがあった。最初は皆さんと同じ、とても不安だった。文化も環境もちがう。最もよいと思うこと、生かせることを生かしてほしい。まず、ここで見たことを伝えてください」と責任者のゴメス氏。この報告がその一助になればと願っています。 2006年3月

茨城県つくばみらい市谷井田 1256-8

川上 文子 0297-58-8130

視察中とてもお世話になったシスター、マリアさんとモンセラットさんありがとうございました

